



地域で作る“生きづらい人々の居場所”

トビラ ファーム

市民公益活動促進補助金
自立促進部門プレゼンテーション
2022年 4月17日

NPO法人南大阪サポートネット

NPO法人南大阪サポートネットの歩み

- 2001年 南大阪サポートネット設立
- 2005年 3月28日、特定非営利活動法人を設立
- 2014年 ひきこもりの若者の自立支援を開始
- 2017年 ひきこもりの若者の居場所
- 『To-Villa (トビラ)』を開設
 - 家族の会、学びの場
 - お弁当作り、各種ワークショップ
 - 講演会やイベントを実施
 - 当事者会(2021年度～)

Mission

『生きづらさ』をサポートする

- わたしたちは、「生きづらさ」を感じている人達の
想いやペースに寄り添い
- 自分たちも一緒になって「お互いさま」の関係の
中から、みんなが「ワクワク、笑って暮らせる」社会
の実現をめざしています

Mission

『生きづらさ』をサポートする

- 私たちが願うのは、
 - **みんなが誰かのサポーター** になること
- それは、誰もが「自分らしく生きる」ため
- みんなが共に支え合い**一緒になって考える** ことからはじまると思っています

ひきこもりの若者の自立支援

すてっぴ by すてっぴ事業

- 競争社会の激化や働くことの価値観の変化等、様々な要因でひきこもりの若者が増えています
- 私たちは「社会的ひきこもり」からの自立をサポートができないかと当事者や当事者家族らに「居場所」と機会を用意しています

ひきこもりの実数（15～39歳）

2016年、内閣府より、ひきこもりの対象者は、
全国で推計**54万人**（予備軍**155万人**）

と発表されている

（注）現実には

実際ひきこもり当事者が閉ざされた環境にあることから
実数の把握は非常に困難を極める

ひきこもりの長期化（40歳～64歳）

- 満40歳から満64歳までのひきこもりの出現率は1.45%で、推計数は**61.3万人**である
- ひきこもり状態になってから7年以上経過した方が約5割を占め、長期に及んでいる傾向が認められること
- 専業主婦や家事手伝いのひきこもりも存在すること
- ひきこもり状態になった年齢が全年齢層に大きな偏りなく分布していること
(内閣府2018年調査)

大阪狭山市に置き換えてみると

- 前述の内閣府対象者調査結果から推計

大阪狭山市におけるひきこもりの対象者は

15歳～39歳 約260人

40歳～64歳 約330人 計 **約590人**

この数字は狭山中学校全校生徒数とほぼ同数

ひきこもりの定義として内閣府は

- 趣味の用事のみときだけ外出する
- 近所のコンビニなどには出かける
- 自室からは出るが、家からは出ない
- 自室からほとんど出ない

この状態が6ヶ月以上 続いている

しかし現実には・・・

外出はできるが経済活動は困難（未就労）

社会での居場所がない（繋がりや所属）

中学生以下（15歳以下）の不登校などの方

590人より はるかに大勢の方々が
困難な状況に置かれている

包摂的な支え合い

対象者を切り離したサポートだけでは不十分

地域で生きる私たち全員の課題

みんなで取り組む ことこそ効果的

包摂的な支え合い

今、少し余力のある人が
自分にできることを 出来るときに 可能なだけ

今、しんどいと感じる人は「助けてほしい」と言える

お互いに無理のない範囲で支え合える

「おたがいさま」の関係性

『食』をテーマにした トビラファームでは

「食べることは 生きること」をベースに

「食」に関連する様々な事業を実施します

- ・タケノコ掘り
- ・スイーツWS
- ・梅干しWS
- ・畑での作物栽培
- ・そば打ちWS
- ・味噌づくりWS
- ・地域食堂
- ・月のまつり
- ・生きづらさを考える集い 等

これらの活動を通して みんなで

心も身体もやすらぐホットステーション

“生きづらい人々の居場所”トビラファームを作り



包摂的社会の必要性和社会的弱者への理解を深め



生きづらさを抱える若者がみんなの関わりの中で

自分の可能性と自己肯定感が育まれる

ご清聴ありがとうございました

これからもご理解、ご協力、ご支援
よろしく申し上げます

自分が困ったら

「助けてほしい」って伝える

おたがいさま

自分にゆとりがある時は

「できることある？」って聴く

そんな社会が実現するといいですね



質問 ①



トビラファームの活動を継続するべきだと考える理由があれば教えてください

ひきこもりを取り巻く課題は複雑でひとりひとり違います。決して慌てることなく、丁寧な伴走が必要です

行政機関の支援から零れ落ちてしまう当事者や家族には投げ出すことなく、長く寄り添い続ける場所が必要です

「食べることは 生きること」

当事者の生きる力の基本を大切にし、その上に自己肯定感を育む機会を積み重ねること

「ウサギとカメ」のように、たとえゆっくりでもゴールに向けて歩む、カメの歩みのような継続した伴走支援が大切だと考えます

質問 ②



自治会や地域住民がトビラファームの活動に関心を持つための取り組みや工夫などがありますか？

下記のトビラファーム以外の事業と共に周知の促進

- ・同じく補助金事業として実態調査やグループ相談
- ・関心のある方を対象にしたひきこもりに関する学び講座
- ・自主事業のお弁当製作 ・居場所トビラの開所 等々

アンケート結果の公表機会を作ることで啓発

積極的に市民活動団体の交流機会に参加

アイデアがあればぜひ教えていただければ嬉しいです